

# 名作再読、拾い読み (26) 『アロウスミスの生涯』 ("Arrowsmith")

小澤 文彦

シンクレア・ルイス (Harry Sinclair Lewis, 1885-1951) は、ミネソタ州ソーク・センターで医者の息子として生まれました。成績優秀な兄と違って、彼は学業成績が余りふるわず、運動神経も鈍いニキビだらけの赤毛の少年で、幼少年時代は劣等感に悩まされ続けました。それを克服しようと頑張って名門イェール大学に入学しますが、4年生の秋に退学届を出して、当時ベスト・セラー作家だったアプトン・シンクレアが主宰する共産主義的な村に入居します。しかし、直ぐにそこから逃げ出して各地を放浪した後、イェール大学に復学しました。卒業後、編集関係の仕事をしながら創作を続け、1920年に『本町通り』を発表すると、アメリカ文学史上、類を見ないほどのセンセーションを巻き起こし、売り上げは数十万部に達し、一躍有名な作家になりました。その後は『バピット』(1922)、『アロウスミスの生涯』(1925)、『エルマー・ガントリー』(1927) といった問題作を次々と発表します。『アロウスミスの生涯』はピュリツァー賞を授与されましたが、本人は受賞を拒否しています。1930年にはアメリカの作家として初めてノーベル文学賞を受賞しました。しかし、この後、長男の戦死、妻との離婚、再婚後の妻との不和などの影響もあってか飲酒癖がひどくなり、創作意欲も衰えていき、旅先のローマで寂しく亡くなります。65歳でした。

今回は、医師マーティンの半生を描きながら基礎研究の重要性と製薬業界の問題点等を追求する『アロウスミスの生涯』を紹介します。

幼少時に両親を亡くしたマーティン・アロウスミスは近くの診療所出入りして医学の本を読むのが好きでした。医者を目指してウェネマック大学の医学部に入学します。夜遅くまで実験を続けていた時、天才的な免疫学者ゴットリープに才能を認められ、助手になります。しかし、疲れて孤独感に襲われ、恋人のリオーラに会いたくて堪らない気分になります。このような時に、些細なミスを犯してゴットリープに叱責され、腹を立てて大学を飛び出しました。その足で直ぐにリオーラに会いに行き、彼女の親や兄の反対を押し切って結婚します。彼女の親がマーティンに出した条件は医学部の卒業でした。そのため、ゴットリープと敵対するシル

ヴァ教授に助けを求めて卒業し、開業医になりました。薬局の経営者と対立して医薬品を入手できずに患者を死なせてしまったり、教会へ通わないことから町の人々の信頼を受けられなかつたりして様々な苦労を味わいますが、最大の悲しみは、リオーラが妊娠したのに赤ちゃんが死産になったことでした。彼は研究生活に戻ることを熱望します。一方、ゴットリープはシルヴァによって大学を追い出され、ある製薬会社に雇われますが、臨床試験が終わっていない血清をすぐに発売したいという経営者と対立してその会社を去り、ニューヨークの研究所に移りました。マーティンの優秀さを認めているゴットリープは、彼を自分の研究所へ呼びます。そこでマーティンは治療に役立つ物質を発見しましたが、他の研究者に先に発表されてしまいました。その物質を治療薬にするには臨床試験が必要なので、ゴットリープは丁度その頃ベストが流行している西インド諸島にマーティンを派遣して臨床試験を行うよう指示します。リオーラはマーティンの反対にも拘わらず同行し、ベストに感染して死んでしまいました。絶望的なマーティンは、試験を止めて患者全員に血清を注射します。島のベストは終息し、研究所に戻ったマーティンは英雄として賞賛されますが、空しさを感じるばかりでした。

その後、彼は島で会った裕福な未亡人と再婚し、男の子に恵まれて何不自由ない生活を送りますが、次第に研究を続けたい気持ちが昂じてきます。同僚テリイが辞職して田舎に新しく研究所を開設したので、マーティンは家族と別れてそこへ行き研究に打ち込むことになりました。

金儲けに走らず、家族愛にも流されない研究者の姿は、現代においても一種のあり得べき理想像かも知れません。

## 参考文献

1. Sinclair Lewis "Arrowsmith" (Harcourt, Brace & World, c1952)
2. シンクレア・ルイス著 岩崎良三訳『アロウスミスの生涯』(『シンクレア・ルイス；ユージン・オニール』[現代アメリカ文学選集10]より) (荒地出版社、1968)

おざわ ふみひこ (情報サービス課)